

# バーリンにおける自由と決定論について

——「歴史の必然性」(一九五三年)との関連を踏まえて——

濱 真一郎

- 一 バーリンの「歴史の必然性」
- 二 ヘーゲル
- 三 ヘーゲルとマルクス
- 四 ヘーゲルとゲルツェン
- 五 ヘーゲルとトルストイ
- 六 バーリンにおける自由と決定論

## 一 バーリンの「歴史の必然性」

本稿の目的は、英国の思想史家アイザイア・バーリンが、自由と決定論についてどのような見解を提示しているのかを確認することである。具体的には、ヘーゲル、マルクス、ゲルツェン、およびトルストイに坎するバーリンの思想史研究が、彼のオーギュスト・コント記念講義「歴史の必然性」<sup>①</sup>（この講義が行われたのは一九五三年）と密接な関連を有することを明らかにしたい。

バーリンの自由論は、自由の観念について検討する部分と、決定論（自由と決定論の問題）について検討する部分がある。前者は主として教授就任講演「二つの自由概念」<sup>②</sup>（一九五八年）で、後者は「歴史の必然性」で論じられている。

ここで、バーリンの「歴史の必然性」の要点を示しておこう。彼はこの講義で、決定論（世界には一つの方向があり、世界はいくつかの法則によって支配されている）<sup>③</sup>が必然的に誤っていると主張したいわけではない。彼が主張したいのは、われわれは決定論が正しいかのように話したり考えたりしてはいない、ということである。例えば、「自由」への信仰が幻想であるとしても、自由はとても根深く、広く浸透しているため、それが幻想だとは感じられない。<sup>④</sup>言い換えれば、自由（あるいは選択、責任）の観念はわれわれの考え方にとても深く埋め込まれているから、その観念をまったく欠いた世界の人間としての自分たちの生活など、われわれにはまったく理解できない。<sup>⑤</sup>とすると、われわれが単に理論においてのみならず、実践においても、自分たちの思考法や話し方を変えないかぎり、決定論の仮説は空虚なままにとどまる。すなわち、われわれが思考や言語を決定論の仮説に適合させようと本気で試みることは、今日においても、記録された歴史においても、ほとんど実行不可能なことからなのである。<sup>⑥</sup>

以上で確認したように、バーリンは、決定論を論駁するのではなく、理論だけでなく実践において一貫して決定論的

に考えたり語ったりするのはほとんど不可能である、ということを示すことによって、決定論の立場を揺り動かそうとしているのである。

さて、筆者は、バーリンの初期の講演である『ロマン主義時代の政治思想』(一九五二年、出版は二〇〇六年)および『自由とその裏切り』(一九五二年、出版は二〇〇二年)に依拠して、ヘーゲルにおける歴史法則と自由について整理したことがある。<sup>9)</sup>ヘーゲルにとって、すべての変化や行為は、諸々の法則に従って発生している。それらの法則は、論理法則と同じく、理解可能なものであり、必然的なものである。よって、それらの法則は合理的である。それらの法則は、世界が自己実現するプロセスを支配している。こうした法則が存在するとすれば、理解することは、「すべてがなるべくしてそうなっている (everything must be as it is)」と「こう」ことを理解することである。そして、自由に行うすることは、その他にはより優れた代替案がないような目的に従って行為することである。完全に合理的な存在は、完全に自己統治をなしており、完全に自由なのである。<sup>10)</sup>

本稿では、バーリンの議論に依拠しながら、ヘーゲルの歴史法則と自由の捉え方を、マルクス、ゲルツェン、トルストイがどのように受け止めたかについて検討する。さらに、バーリンが、以上の思想家たちの見解を踏まえて、決定論と自由についての彼自身の見解を提示するに至ったことを、明らかにしたい。

## 二 ヘーゲル

本章では、バーリンの『カール・マルクス〔第四版〕』<sup>11)</sup>に依拠して、ヘーゲルの歴史の捉え方を確認し、ヘーゲルの歴史法則と自由の捉え方について検討する。(バーリンは同書の第三章で、マルクスを論じるための準備作業として、

ヘーゲルについて論じている。)

\* 本稿で『カール・マルクス〔第四版〕(Karl Marx, fourth edition)』を参照する際にはKMという略号を用いて、本文中に原著と邦訳の頁数を記す。

まずは、ヘーゲルの歴史の捉え方についてみていこう。

バーリンによると、一八世紀は、前世紀における数学や物理学の進歩によって影響を受けていた。そのため、ケプラー、ガリレオ、デカルト、ニュートンが成功裏に用いた方法が、社会現象や生の営みの解釈に適用された。こうした動向を生み出した人物を一人だけあげるならば、それはヴォルテールである。新思潮の勝利は、ヨーロッパ文化に大きな影響を及ぼした (KM, pp. 31-32, 33. 邦訳、四四頁、四六頁)。

この新思潮に対する反撃は、世紀の転換と共にはじまっていた。その反撃は、ドイツの土壤に育ったが、すぐに全文明世界に広がった。ドイツは、三十年戦争によって精神的にも物質的にも傷ついていたが、十八世紀末までには、ドイツ独自の文化を再度作りはじめていた。ナポレオン戦争は、傷ついたドイツ人の知的自尊心に、軍事的敗北という屈辱をつけ加えた。そしてドイツでは、強固な愛国的反動が戦時中にはじまり、それはナポレオンの敗北後に国民感情を高揚させた。この愛国的反動は、カントの後継者たちの新しいいわゆるロマン主義の哲学と同一化した。それは、フイヒテ、シエリング、シュレーゲル兄弟らの哲学のことである。フランス人やイングランド人の科学的経験主義に対して、ドイツ人は、ヘルダーやヘーゲルの形而上学的歴史主義を前面に押し出した (KM, pp. 33-34. 邦訳、四七一―四八頁)。

一八世紀の古典的哲学者たちは以下の問いを發した。すなわち、人間が、自然における一つの物体でしかないとしたら、人間の行動を支配する法則とは何なのか。こうした法則を、ニュートンやガリレオに匹敵する人物が発見してはじ

めて、真の社会科学が登場することになるというのである (KM, p.34. 邦訳、四八一―四九頁)。

この急進的な経験論は、ヘーゲルには、科学的な独断主義の具体化であるように思えた。それは、自然科学において成功した方法だけがその他の経験領域においても通用しうる、という誤った考えを伴っていた。ヘーゲルは、この新しい方法論について、それを物質的世界に適用することにすら懐疑的であったが、それを人間の歴史に適用すれば破滅的な結果をもたらすと確信していた。もしも歴史が、ヴォルテールやヒュームが言う意味での科学的法則に従って叙述されたら、事実についての恐ろしい歪曲がもたらされるであろう (KM, pp. 34-35. 邦訳、四九頁)。

さて、ドイツの哲学者ヘルダーは、おそらくヨーロッパにおける国家的・文化的な自意識の発展の影響を受けて、さらにフランス哲学のコスモポリタニズムや普遍主義への嫌悪から、組織的發展(後にそう呼ばれるようになったもの)という概念を、個人にだけでなく、文化全体や国家全体の歴史に適用した。ヘルダーは、個人は社会の特定の発展段階において登場するのだから、文化全体や国家全体の方が個人よりも重要だとした。ヘーゲルは以上のヘルダーの考えを、さらに包括的かつ野心的に發展させた。彼は、個人の人格的特性という概念を、文化全体や国家全体の特性へと転換させた。彼は後者を、理念ないし精神 (the Idea or Spirit) と呼んでこそ (KM, pp. 36-38. 邦訳、五一―五五頁)。

バーリンによると、ヘーゲルの真の重要性は、社会研究および歴史研究の分野での彼の影響にある。ヘーゲルは、人間の諸制度の歴史および批判のための新しい教説を創設した。人間の諸制度は、大いなる集合的な疑似的人格であり、それら(諸制度)自体が生命と性格を有している。人間の諸制度は、自らを構成する諸個人に注目するだけでは、完全には記述できないのである。この思想上の革命は、非合理的で危険な神話——国家、人種、歴史、時代などは影響力のある超越的人格である——を生み出したが、人文科学にとっては大いに有益であった。ドイツの歴史家たちの新しい学派の登場は、ヘーゲルの影響に負うところが大きかった (KM, p. 40. 邦訳、五八頁)。

ヘーゲルにとつて、歴史は絶対精神 (the Absolute Spirit) の発展である。とすると、歴史は、精神が達成したこと  
の歴史として書き改められる必要がある。例えば法制史は、考古学者や古物収集家の人里離れた特別保護区ではなくな  
り、歴史法学として生まれ変わった。歴史法学においては、現在の法制度は、古代ローマ法(ないしそれ以前の法)か  
ら秩序正しく進化したものとして解釈されるのである (KM, p. 40. 邦訳、五八一―五九頁)。

さて、ヘーゲルは、円滑な進歩という考え方は取らなかった。彼は、衝突や戦争や革命は、現実が発生するのであり、  
それらは不可避であると考えた。彼は (フィヒテに倣つて)、すべての進歩は、両立不可能な複数の力のあいだの不可  
避的な緊張関係の一部であり、この緊張によつて発展がもたらされると主張した。こうした進歩は無限に続くものであ  
り、ヘーゲルはそれを弁証法的な進歩と呼ぶ。彼は、発展をもたらす緊張や闘争という観念によつて、歴史の動向を説  
明するために必要な動態的原理を提供したのである (KM, p. 41. 邦訳、五九一―六〇頁)。

ヘーゲルが提示した新しい研究方法は、ドイツの見識のある人々だけでなく、ドイツ文化に依存していたペテルブル  
グやモスクワの大学にも大きな影響を与えた。ヘーゲル主義は、知的自負心を有するほとんどすべての人々にとつての  
公的な信条となったのである (KM, p. 42. 邦訳、六一頁)。

以上で、ヘーゲルの歴史の捉え方について確認した。次に、ヘーゲルの歴史法則と自由の捉え方について整理してい  
こう。

バーリンによると、ヘーゲルにとつて、真の自由は、自己支配に、すなわち外的支配を受けないことに存する。真の  
自由は、自分は何者であるか、何者になりうるかを発見することによつてのみ達成できる。自分が生きている特定の時  
と場所において、自分が必然的に従っている法則を発見し、自分の合理的本性——法則に従う本性——の潜在性を実現  
しようと試みることによつて、達成できるのである。この潜在性が実現されると、個人および、個人が「有機的に」帰

属している社会が、前進することになる (KM, p. 43. 邦訳、六三頁)。

「世界的」な人物は、自らの目的を理解し、歴史法則を具体化することができるから、過去とうまく決別することができる。それに対して、それほど偉大ではない人物は、もしも自分の内的理想に基づいて伝統を(修正するのではなく)破壊しようと試みたり、その試みによって歴史法則に抵抗したりするならば、不可能なことを試みており、自分の非合理性を示しているということになる。その人物の行為は、必然的に失敗するからというだけでなく、無駄であるからという理由で、非難されることになる。その行為が非難されるのは、その行為が抵抗している歴史法則が、すべてを統合する究極的な実質である絶対精神 (the Spirit) の法則だからなのである (KM, p. 43. 邦訳、六三頁)。

### 三 ヘーゲルとマルクス

以上で、バーリンに依拠して、ヘーゲルの歴史法則と自由の捉え方について検討した。以下では、マルクス、ゲルツェン、およびトルストイの三人が、ヘーゲルと対峙した上でそれぞれ独自の見解を提示していることを確認する。

本章ではマルクスを取り上げる。すなわち、まずは彼の基本的主張について確認する。次に、彼の理論の枠組みは一貫してヘーゲル的であるけれども、いくつかの点でヘーゲルの考えとは異なるということを確認する。その上で、マルクスの歴史法則と自由の捉え方について検討することにした。

それでは、まずはマルクスの基本的主張について確認しよう。

バーリンによると、マルクスは理想ではなく歴史に訴えることによって、既存の秩序を糾弾した。マルクスは基本的に、既存の秩序を、それが不正だとか嘆かわしいとか、人間の邪悪さや愚かさ由来しているという理由ではなく、社

会発展の法則の結果として糾弾したのであった。その法則によると、歴史の特定の段階で、ある階級は別の階級から搾取し、人々を抑圧する。抑圧者は、被害者からの報復によってではなく、歴史が抑圧者のために用意している不可避的な破滅によって脅かされることになる。すなわち、ある階級は、これまで社会的役割を果たしてきたけれども、人間の営みの舞台から突如として姿を消すように運命づけられているのである (KM, p. 5 邦訳、七一―八頁)。

マルクスによると、社会の歴史は、自らの創造的な労働によって自分自身と外部の世界を支配しようとする人間の歴史である。こうした人間の活動は、対立する階級間の闘争において具体化し、一つの階級が勝利する。一つの階級の別の階級に対する勝利が積み重なって、進歩がもたらされるのである (KM, pp. 5-6 邦訳、八頁)。

次に、マルクスの理論の枠組みは一貫してヘーゲル的であるけれども、いくつかの点でヘーゲルの考えとは異なるということを確認していこう。

バーリンによると、当初ヘーゲル主義は、マルクスの実証主義的な知性とは折り合いが悪かった。しかしマルクスは、ヘーゲルの著作を精力的に研究し、やがてヘーゲル主義への転向を表明した (KM, pp. 51-52 邦訳、七四―七五頁)。

マルクスの理論の枠組みは一貫してヘーゲル的である。それは、人間の歴史は一直線の不可逆的な進歩であり、その進歩は発見可能な法則に従っている、というものである。ところがマルクスの理論には、ヘーゲルを批判する部分もある。すなわち、ヘーゲルによれば、歴史を構成する諸状況の連なりである単一の実体は、永遠の、自己発展的で、普遍的な精神である。その構成要素のあいだの衝突は、例えば、宗教紛争や、国家間の戦争として具体化する。それらは自己実現する理念が具現したものである。それに対してマルクスは、フォイエルバッハに依拠しながら、以上のヘーゲルの考えは、いかなる知識もそれによって基礎づけられない神秘化とした。なぜなら、もしも世界がこの種の形而上学的実体であるとしたら、世界の動きを、経験的観察によって検証できなくなるからである。さらに、世界について



の理論を、科学的方法によって確証できなくなるからである (KMJ, pp. 90-91. 邦訳、一三八―一三九頁)。

さて、ヘーゲルにとって、市民社会の発展を促すのは、対立する複数の力のあいだの緊張関係である。では、そうした緊張関係を生み出す複数の力とは何か。ヘーゲルは、それらの力は、近代社会においては民族に具体化されていると示唆した。民族は、特殊な文化の発展を担い、理念ないし世界精神を具現しているのである。それに対してマルクスは、サン＝シモンとフーリエに従って、おそらくシスモンディ (スイスの歴史家・経済学者) の恐慌理論にも影響されながら、それらの力は主として社会経済的なものであると主張した。ヘーゲルの言う市民社会の分析は、政治経済学的になされねばならないのである (KMJ, p.92. 邦訳、一四〇―一四二頁)。

最後に、マルクスの歴史法則と自由の捉え方について検討しよう。

バーリンによると、マルクスは決定論的であったけれども、「所与の経済構造や社会構造は変化させられない世界秩序の一部である」という考えは、人間にとって自然な形式の生からの疎外によってもたらされた幻想である、ということを示そうと決意していた。この考えは、「脱神秘化」された理性および科学によって除去されるというのである。しかし、これでは十分ではない。この考えは、それを生み出す生産関係 (所与の経済構造や社会構造) が存続する限り、そのまま残ってしまう。生産関係を変えることができるのは革命という武器だけである。さて、こうした解放活動は、客観的法則によって決定されている。客観的法則は、(人間の判断や行為から独立した不可避的なパターンに従う) 物体の動きだけでなく、人間の思考と意志も決定しているのである (KMJ, p. 102. 邦訳、一五八―一五九頁)。

ただし、もしもマルクスが信じるように、人間の選択が出来事の道筋に影響を与えることができるとしたら、そうした選択が究極的には決定されていて科学的に予見できるとしても、この状況 (人間の選択が出来事の道筋に影響を与えることのできる状況) において、人間は自由である。なぜなら、人間の選択は、自然の他のものとは異なり、機械的に

は決定されていないからである (KM, p. 102; 邦訳、一五九頁)。

歴史の法則は機械的なものではない。歴史は人間によって作られてきた。すなわち、歴史は、人間が作り出す社会状況によって、完全に形作られてきたわけではないけれども、制約を受けている。では、マルクスにとつて、歴史の法則は、人間の自由——個人の自由であれ集団的な自由であれ——といかなる関係を有するのか。彼は、社会の進歩を、自由の漸進的獲得と同一視している。社会の進歩を漸進的にもたらすのは、人間の意識的で、一致団結的で、合理的に計画された、協調的な社会活動である。こうした社会活動、すなわち人間の社会化は、かつては自然や歴史によって人間に突きつけられた現実であったが、やがて人間の自由な行為によって達成されるようになるだろう。ここにおいて、必然性の領域から自由の領域への人間の飛躍がもたらされるのである (KM, pp. 102-103; 邦訳、一五九—一六〇頁)。

#### 四 ヘーゲルとゲルツェン

次に、ゲルツェンの歴史法則と自由の捉え方について検討する。ゲルツェンは、一九世紀における最も注目されるロシアの政治的作家である<sup>12)</sup>。モスクワ大学で学ぶ青年ゲルツェンへの主たる影響は、彼の同世代のすべての若きロシア知識人と同様、ヘーゲルのそれであった。しかし、彼は当初は正統的ヘーゲル主義者であったが、やがて自分のヘーゲル主義を、自分独自のものに変えていくことになる<sup>13)</sup>。

以下ではバーリンに即して、まずは一八世紀啓蒙主義の特徴および、それに対するロマン主義（とくにヘーゲル派の運動におけるそれ）からの攻撃について、確認する。その上で、そうしたロマン主義の時代に生きたゲルツェンが、ヘーゲルに影響を受けつつも、やがて歴史法則と自由にかんする彼独自の捉え方を提示するに至る様子を整理していき

い。

\* 以下、本稿では、バーリンの「ゲルツェンとバクーニン——個人の自由をめぐる」（Herzen and Bakunin on Individual Liberty）」をHBLと略記し、参照する際には本文中に、原書および邦訳の頁数を記す。

それではまず、一八世紀啓蒙主義の特徴および、それに対するロマン主義（とくにヘーゲル派の運動におけるそれ）からの攻撃について確認しよう。

バーリンによると、一八世紀啓蒙主義の中心的観念は、人間の苦難・不正・抑圧の原因は、人間の無知と愚かさにあるという信念であった。物理世界を支配する法則が、聖なるニュートンによつて発見および定式化されさえすれば、人間は自然を支配できるようになる。すなわち、人間は、自然の因果法則を理解し、その法則に従うことによつて、最大限に幸せに生きることができるとし、（無知ゆえにその法則に誤つて抵抗して）苦痛を被ることもないのである（HBL, p. 95; 邦訳、二〇六頁）。

ところが、フランス革命の諸帰結——筆者の理解ではジャコバン派の恐怖政治やナポレオンの周辺諸国への軍事的脅威など——がこの思想の魔力を解いてしまった。その思想が間違っていることを説明しようとする教義のなかで、ドイツ・ロマン主義（とくにヘーゲル派の動向におけるそれ）が主要な位置を占めた（HBL, p. 96; 邦訳、二〇七頁）。この教義には多くの形態（ドイツ・ロマン主義的なもの、神秘主義的なもの、一八世紀の自然主義に回帰するものなど）があるが、それらは以下の信念を共有している。すなわち、客観的な目的を発見することができるのであり、この客観的な目的こそが、すべての社会的・政治的・個人的な活動にとつての適切な目的なのである、という信念である（HBL,

pp. 97-98. 邦訳二一〇—二一一頁)。

この大いなる独断的見解は、ドイツの形而上学的天才によって啓示され、賛美され、イメージや言葉を尽くして華々しく描写されたのであった。そしてそれは、フランス、イタリヤ、ロシアの最も高名かつ思慮深い思想家たちによって称賛されたのである (HBIL, p. 98. 邦訳、二一一頁)。

以上で、一八世紀啓蒙主義の特徴および、それに対するロマン主義からの攻撃について確認した。以下では、ロマン主義の時代に生きたゲルツェンが、歴史法則および自由にかんする彼独自の捉え方を提示するに至る様子を整理していきたい。

ゲルツェンは、上記の偉大なる独断的見解に反旗を翻した。彼がその見解の根拠を否定し、その結論を非難したのはなぜか。それは、その見解が単に、道徳的に不快であったという理由だけではない。それに加えて、その見解が、知的に見かけ倒しであり、美的に派手すぎであつて、自然を拘束用上着 (ドイツの偽物の学者たちの貧相な空想上の産物) に無理やり押し込める試みに思えたからである (HBIL, p. 98. 邦訳、二一一頁)。

ゲルツェンはさらに、自分自身の倫理的および哲学的信念を提示した。そのなかで最も重要なのは以下である。すなわち、自然は計画に従わない。歴史は台本に従わない。原則として、個人ないし社会の問題を解決する単一の鍵はないし、公式も存在しない。一般的な解決は解決ではない。普遍的な目的は真の目的ではない。時代ごとにそれぞれの文脈と問題が存在する。単純化や一般化が経験に取って代わることはない。自由——特定の時と場所で生きている、現実の個人の自由——は究極的な価値である。自由に行為するための最小限の領域は、すべての人間にとつての道徳的な必要性である。この領域は、抽象的用語や一般の原理 (永遠の救済、歴史、人間性、進歩、さらには国家、教会、プロレタリアートなど) の名の下に、抑圧されてはならぬ (HBIL, pp. 98-99. 邦訳、二一一—二一二頁)。

ゲルツェンによると、抽象語——歴史、進歩、国民の安全、社会的平等——は無実の人々を犠牲に供する祭壇であった。バーリンはここで、抽象語としての「歴史」に注目する。もしも歴史が、不可避的な方向性、合理的構造、ないし目的（おそらく有益な目的）を有しているなら、われわれはそれに自らを合致させるか、滅びるしかない。しかし、歴史の合理的な目的とは何なのか。ゲルツェンはそれを理解することができない。彼は歴史に何の意味も見出すことができず、「代々の慢性的狂気」の物語を見るだけである。歴史書をひもとけば数百万の例がある。ゲルツェンは、自分の娘を供物として捧げた父親、野獣によって引き裂かれたキリスト教徒たち、そして今度はキリスト教徒たちによる別の人々への迫害と拷問、異端者たちの火あぶりなどに言及している。結局、歴史の目的とは何なのか（HBIL, pp. 102-103. 邦訳、二一七—二一八頁）。

バーリンは次に、抽象語としての「進歩」に注目する。進歩について語ったり、未来のために現在を犠牲にしたり、遠い未来の子孫たちが幸福であるために今日の人々を苦しめる準備をしている人たちがいる。この態度は、反動的ヘーゲル派や革命的共産主義者や、思弁的な功利主義者や教皇至上主義の熱狂的支持者といった、高貴だが実現不可能な目的のためにおぞましい手段を正当化するすべての人々に、共有されていた。バーリンによると、ゲルツェンはこうした態度を、もつとも激しく軽蔑し、嘲笑したのである（HBIL, p. 104. 邦訳、二二〇頁）。

ゲルツェンは以上の態度に対して以下のように反論する。すなわち、自由のための闘争の目的は、ここで、今日、生きていく個人たちの自由である。各個人がそれぞれの目的を有している。未来の至福のために、今日生きている個人の自由を抑圧し、その目的を破壊するというのは、愚かで悪質なことである。というのも、未来はいつもあまりにも不確定だからである。さらに未来は、抽象的な自由、幸福、正義の名の下に、今日のわれわれが知っている道徳的価値を侵害し、現実の人間の生や必要性を踏みじじるからである（HBIL, p. 107. 邦訳、二二四—二二五頁）。

人間は自分自身の時代に生きたいと望む。人間の道徳は、歴史法則（それは存在しない）からも人間の進歩の客観的な目的（そのようなものは存在しない。それは環境や人物が変わるにつれて変わる）からも、引き出すことができない。道徳的目的は人々が自分たち自身のために望むものである（HBL, p. 108, 邦訳、二二六頁）。

さて、バーリンによると、ヘーゲルとマルクスは、ブルジョワジーの悲運と新しい文明を予言した。それに対してゲルツェンは、そうした大変動が不可避的とも輝かしいとも考えなかった（HBL, p. 112, 邦訳、一三三頁）。ゲルツェンにとって、歴史は決定されていない。幸運なことに、人生には台本がない。常に即興が可能なのである。形而上学者によつて準備された綱領を未来が実現するというのは、必然的なことではない。明日の自由が「客観的」に保証されているという理由で、今日の自由を踏みこじめることを正当化するのは、不正な行為のための言い逃れとして、残酷でよこしまな欺瞞を用いることである（HBL, p. 114, 邦訳、一三四頁）。

バーリンによると、ゲルツェンはさらに続ける。人間はもちろん、その環境と時代に依存している。人間は、自分が生きている時代を反映しているし、自分が生きている環境に影響を受けている。しかし、社会の生活環境に反抗したり、それに抵抗したりすることは——それが効果的か否かはともかく、さらにそれが社会的になされるか個人的になされるかはともかく——可能である。決定論への信仰は弱さを隠すためのアリバイに過ぎない。すなわち、人間の行路はまったく変えられないわけではない。むしろそれは、環境や、人間の理解力や行動力によつて変化する。出来事によつて人間が作られるが、人間もまた出来事を作っているのであり、出来事に痕跡を残している。永遠の相互作用が存在するのである（HBL, pp. 114-115, 邦訳、一三五頁）。

## 五 ヘーゲルとトルストイ

次に、トルストイに注目しよう。バーリンは著書『ハリネズミと狐』でトルストイについて論じている。具体的には、トルストイの歴史法則および自由の捉え方と、トルストイにおける一元論と多元論について論じている。本稿では前者（トルストイの歴史法則および自由の捉え方）に焦点を合わせて検討する。

\* 以下、バーリンの『ハリネズミと狐』(The Hedgehog and The Fox)<sup>(15)</sup>をHEと略記し、参照する際には本文中に、原書および邦訳の頁数を記す。

まずはトルストイの歴史法則の捉え方について見ていこう。

バーリンによると、トルストイはヘーゲル哲学の全盛期に育った。ヘーゲル哲学は、すべてのものを歴史の発展という観点から説明しようとするが、歴史の発展は究極的には、経験的調査の方法によっては説明できないと考えていた。トルストイの時代の歴史主義は、同時代のすべての探究的な人々と同じく、若いトルストイにも間違いなく影響を与えた。しかし彼は、その形而上学的内容を本能的に拒否した。彼はある手紙のなかで、ヘーゲルの著作を、陳腐な内容で埋め尽くされた理解不能なわけの分からない文章と、表現していた(HE, p. 33. 邦訳、二二六頁)。

トルストイにとって、歴史とは、時空における具体的な出来事の総計である。すなわち、現実の人間たちの現実の世界における実際の経験の総計である。歴史、すなわち経験的に発見可能な資料の総計だけが、実際に起こったことがなぜそのように起こり、そのようにしか起こらなかったのか、という謎を解く鍵を握っていた(HE, p. 33. 邦訳、二五一―二七頁)。しかし、歴史は、それが歴史家によって書かれると、実現できないようなことを主張しているように感じら

れた。なぜなら、形而上学的な哲学と同じく、歴史は自らが実際にはそうではない何か——確実な結論に到達できる科学——であるように装うからである (HF, p. 34, 邦訳、二七二―二八頁)。

さて、歴史は科学的であることができる (そうあるべきである) という命題は、一九世紀にはありきたりな意見であった。しかし、「科学的」という言葉を、自然科学を意味するものとして解釈した人々や、歴史がこの意味での科学に転換できるかを問うた人々の数は、それほど多くはなかった。歴史を科学に転換する最も徹底した試みは、オーギュスト・コントのそれであった。彼はサン＝シモンに従い、歴史を社会学に転換しようと試みた。マルクスは、この計画を最も真剣に受け止めた (HF, p. 35, 邦訳、二九―三〇頁)。

マルクスと同じく、トルストイも以下のように考えていた (『戦争と平和』の執筆時にはマルクスのことを知らなかったが)。すなわち、もしも歴史が科学であるとするならば、例えば地質学や天文学において可能となったように、将来を予見できる (あるいは過去の出来事を推測できる) ような歴史法則を発見したり、そうした法則を定式化したりできるに違いない、と。しかしながらトルストイは、マルクスおよびその継承者たちとは違って、実際にはそのようなことはできないと考えたのである (HF, p. 36, 邦訳、三〇頁)。

トルストイは一八五〇年代を通じて、個人および共同体の「現実」の生活感覚 (texture of life) を、歴史家によって提示される「非現実」の描写と対照させるという主題で、歴史小説を書いてみたいと強く願っていた (HF, p. 37, 邦訳、三二頁)。

『戦争と平和』では、登場人物の一人であるピエール・ベズーホフは戦場をさまよい、自分が想像していた典型的な戦争の場面を、すなわち歴史家や画家が描くような戦闘場面を探し回った。しかし、彼が目にしたのは、自分の欲求を行き当たりばつりに満たそうとする個々の人間たちの混乱であった。こうしてピエールは、物事の進行は法則に従っ



ていると信じる人々よりも、物事の進行についての真実に近づくことになる。彼が見ているのは、その原因を探ったり、その結果を予測したりすることのできない「偶然」の連続にすぎない。それは、緩やかに結びついている一連の出来事に過ぎないのであって、それぞれの出来事を結びつける定まったパターンはないし、確固たる秩序に従って結びついていくわけでもない。結局、「科学的」な公式に服するパターンを把握できる、という主張は真実ではないのである (HE, p. 39; 邦訳、二六二―二七頁)。

さて、バーリンによると、トルストイは科学的な社会学にも厳しい非難を浴びせている。科学的な社会学は、歴史法則を発見したと主張するが、そのようなものを発見することはできない。なぜなら、出来事が起きる原因の数は、人間が知ったり計算したりするにはあまりにも多すぎるからである。われわれは、ごく少数の事実しか知らないし、その事実からいくつかを任意に、われわれの主観的な傾向に従って選んでいる。われわれが全知であれば、歴史の流れを構成するすべての水滴の道筋を描写できるであろう。しかし、われわれは痛ましいほどに無知であるし、われわれが知っている領域は、われわれが知らない領域や、知ることのできない (バーリンによると、トルストイはこの点を強調する) 領域よりも、信じられないほど小さいのである (HE, pp. 45-46; 邦訳、四九一―五〇頁)。

次に、トルストイの自由の捉え方について見ていこう。

バーリンによると、トルストイの態度は揺れ動くことがあった。すなわち、人間は自分一人が関係しているときは「ある意味で」自由である。人間は、自分の腕を上げるときに、物理学的制限の範囲内であれば自由である。しかし、他者との関係に巻き込まれると、人間はもはや自由ではなく、逃れられない流れの一部となる。自由は存在するが、それはささいな行為に限定される。時には、このかすかな希望の光も消滅してしまう。あるいはトルストイは、普遍法則の小さな例外さえも認めることができないと主張する。因果的決定論が完全に行き渡るか、それが全く存在せずに混沌が支

配するかのどちらかである。人間の行為は、社会関係に束縛されていないように見えるとしても、自由ではない。人間の行為は、社会関係の一部なのであるから、自由ではありえないのである (HE, p. 49, 邦訳、五六頁)。

さて、科学は、われわれの自由の意識を否定することはできるが、それを破壊することはできない。すなわち、因果関係の連鎖は、われわれがそれを感じようと感ぜまいと、存在している。しかし、幸運なことに、われわれはそれを感じないのである。もしも因果関係の連鎖の影響力を知ったら、われわれは行為できなくなってしまうが、問題はない。なぜなら、われわれは因果関係の連鎖のすべてを発見することは決してできないからである。歴史家は、無限の因果関係の連鎖のなかから、ごく一部だけを取り出して、それによってすべてを説明しようとする。これでは理想的な歴史科学が機能するわけではない (HE, p. 49, 邦訳、五六―五七頁)。

われわれは実際には自由ではない。しかし、自由であるという信念がなければ生きていけない。とすると、われわれはどうすればよいのか。バーリンによると、トルストイは明確な答えに到達していないけれども、ある点でバークに似た見解に到達している。それは、起こっていることを、われわれが実際にそれを理解しているままに理解する、ということである。すなわち、理論に染まっておらず、科学の権威が示したほこりで目を曇らされないような普通の人々が、実際に生を理解しているままに理解することである。この理解の仕方は、極めて不適切なデータに依拠しているがゆえに単なる妄想でしかない疑似科学を尊重して、長期にわたる経験的検証に耐えてきた常識的信念（われわれは自由であるという信念）を破壊するよりも、望ましいのである (HE, p. 50, 邦訳、五八―五九頁)。

## 六 バーリンにおける自由と決定論

本稿の目的は、バーリンが、自由と決定論についてどのような見解を提示しているのかを確認することであった。具体的には、ヘーゲル、マルクス、ゲルツェン、およびトルストイにかんするバーリンの思想史研究が、彼の「歴史の必然性」という講演と密接な関連を有することを、明らかにすることであった。以下、この四人にかんするバーリンの思想史研究を振り返っておこう。

ヘーゲルは、各人が自分の生きている特定の時と場所において、自分が必然的に従っている法則を発見し、自分の合理的本性（法則に従う本性）の潜在性を実現しようと試みることによって、自己支配としての真の自由が獲得されるとする（KM, p. 43, 邦訳、六三頁）。

マルクスは、ヘーゲルと同じ理論枠組みを用いつつも、人間の意識的で、一致団結的で、合理的に計画された、協調的な社会活動によって、必然性の領域から自由の領域への人間の飛躍がもたらされるとする（KM, pp. 102-103, 邦訳、一五九—一六〇頁）。

ゲルツェンも当初は正統的ヘーゲル主義者であったが、やがて自分のヘーゲル主義を、自分独自のものに変えていくことになる<sup>(16)</sup>。ゲルツェンによると、人間はもちろん、その環境と時代に依存している。人間は、自分が生きている時代を反映しているし、自分が生きている環境に影響を受けている。しかし、社会の生活環境に反抗したり、それに抵抗したりすることは——それが効果的か否かはともかく、さらにそれが社会的になされるか個人的になされるかはともかく——可能である。決定論への信仰は弱さを隠すためのアリバイに過ぎない（HBL, p. 114, 邦訳、二三五頁）。

若いトルストイもヘーゲル哲学に影響を受けた。しかしトルストイは、その形而上学的内容を本能的に拒否した(HB,

p. 33 邦訳、二六頁)。トルストイによると、われわれは実際には自由ではない。しかし、自由であるという信念がなければ生きていけない。とすれば、われわれはどうすればよいのか。バーリンによると、トルストイは明確な答えに到達していないけれども、ある点でバークに似た見解に到達している。それは、起こっていることを、われわれが実際にそれを理解しているままに理解する、ということである (HEF, p. 50. 邦訳、五八一―五九頁)。

以上で再確認したように、ヘーゲルは、自己支配としての真の自由を獲得するためには、歴史法則に従うための合理的本性が重要だとする。マルクスは、基本的にヘーゲルの理論枠組みを継承しつつも、人間の意識的な活動によって、自由が獲得される可能性を示している。ゲルツェンは、当初は正統派ヘーゲル主義者であったが、やがてヘーゲル主義を自分独自のものへと変化させた。すなわち、人間はもちろん、その環境と時代に依存しているけれども、社会の生活環境に反抗したり、それに抵抗したりすることができるといっているのである。トルストイは、ヘーゲル哲学に影響を受けつつも、その形而上学的内容を本能的に拒否した。すなわちトルストイは、われわれは実際には自由ではないけれども、自由であるという信念がなければ生きていけないのであると、主張するのである。

ここにおいて明らかのように、マルクス、ゲルツェン、トルストイは、ヘーゲルとの対峙を経て、歴史法則と自由にかんしてそれぞれ独自の捉え方を提示しているのである。

バーリン自身は、「歴史の必然性」という講演において、決定論（世界には一つの方向があり、いくつかの法則によって支配されている）<sup>17</sup> および自由にかんして、彼自身の見解を提示している。本稿の冒頭で確認したように、彼は、決定論を論駁するのではなく、理詰りだけでなく実践において一貫して決定論的に考えたり語ったりする——例えば「自由」について——のはほとんど不可能である、ということを示すこと<sup>18</sup>によって、決定論の立場を揺り動かそうとしているのである。

さて、ここで一九三〇年代のオックスフォード哲学に耽るバーリンのエッセーに、注目しておこう。彼はそこで、A・J・エアーについての、自分（バーリン）とジョン・L・オースティンの会話について振り返っている。

オースティンは研究会の最中に、当時は確信に満ちた決定論者であったエアーを挑発しないよう、低い声でバーリンに言った。「彼らはみな決定論について語り、そしてそれを信じていると言う。私は、これまで一度も決定論者に会ったことがない。君と私が人間はいつかは死ぬと信じているのと同じような意味で、それを本当に信じている人という意味だがね。君は会ったことがあるかね。」この発言で、バーリンはオースティンに親しみを感ずるようになった。<sup>19</sup>

ある時、散歩をしながらバーリンはオースティンに質問をしたが、それに対する彼の答えによっても同じく、バーリンは彼に親しみを感ずった。<sup>20</sup>以下、長くなるがバーリンの文章を引用しておこう。

私は彼に尋ねる。「ある子供が、オーストリッツの戦いの時のナポレオンに会いたいというでしょう。私はいう、『それはできないよ』、すると子供は言う、『何故できないのか』、それにたいして、『それは過去に起こったことだからだ。いま生きていて、同時に一三〇年前に生き、同じ年齢でいることはできない』といったことを、私が言う。その子はしつこく続けて、『何故できないのか』と言う。私は、『同時に二つの場所にいることができるとか、過去に帰ることができるとか言うのは、われわれの言葉の使い方では意味をなさないからだ』等々のことを言う。するとこの高度に洗練された子は言う、『もしもそれがたんなる言葉の問題ならば、われわれの言葉の用法を変えさえすればよいではないか。そうすれば私はオーストリッツの戦いのナポレオンに会えて、しかももちろん場所と時間では今居るところに居られるようになるではないか。』私はオースティンに尋ねた。「その子になんと言うべきなのか。それは、いわば物質論と形式論を混同しているとも言えよいか。」オースティンは答えた。「そうは

言うな。その子には、過去に帰ることを試してごらんと言えよ。法則に反しているわけではないと言いたまえ。やらせてごらん。やらせて、どうなるか見させてごらん<sup>(21)</sup>。」

以上のオースティンとバーリンの会話を踏まえるならば、「確信に満ちた決定論者には、一貫して決定論的に語ってごらんと言えよ。例えば『自由』について語らせて、どうなるか見させてごらん」ということになるだろう。

結局、バーリンは決定論を論駁しようとは試みていない。彼はむしろ、おそらくオースティンを意識しながら、一貫して決定論的に語ることは実行不可能である、という主張をなすことによって、決定論が必然的に正しいわけではないということをし、さらに、もしも決定論が正しいとしても自由の概念が存在する余地があるということをし、示しているように思われる。そして、バーリンの以上の考えは、ヘーゲル、マルクス、ゲルツェン、トルストイらにかんする彼の思想史研究によって、裏づけられているのである。

バーリンは、自分の「歴史の必然性」は多くの論争を巻き起こしたけれども、その論争は現在も続いていると、晩年の論文において述べている<sup>(22)</sup>。彼は一九九七年に亡くなったが、二一世紀の現在もその状況は同じであると言えるだろう。

(1) この講義は一九五三年に「アリバイとしての歴史 (History as an Alibi)」という表題で行われ、一九五四年に『歴史の必然性』という小冊子として出版された。本稿では以下を典拠とする。Isaiah Berlin, 'Historical Inevitability', in Isaiah Berlin, *Liberty: Incorporating Four Essays on Liberty*, edited by Henry Hardy (Oxford: Oxford University Press, 2002). 生松敬三訳「歴史の必然性」アイザイア・バーリン著、小川晃一ほか共訳『自由論』(みすず書房、一九七一年)。

(2) これは、オックスフォード大学チチェリ講座の社会・政治理論教授への就任講義である。講義そのものは一九五八年に行われ、同年に出版された。本章では以下を典拠とする。Isaiah Berlin, 'Two Concepts of Liberty', in Isaiah Berlin, *Liberty*, *supra* note 1. 生松敬三訳「二つの自由概念」アイザ

イア・バーリン著、小川晃一ほか共訳・前掲注(1)『自由論』。

- (3) Isaiah Berlin, 'Historical Inevitability', *supra* note 1, p. 114. 邦訳『二〇四頁』。
- (4) *Ibid.*, pp. 122-123. 邦訳『二一九頁』。
- (5) *Ibid.*, p. 162. 邦訳『二八七頁』。
- (6) *Ibid.*, p. 123. 邦訳『二一九二〇頁』。
- (7) Isaiah Berlin, *Political Ideas in the Romantic Age: Their Rise and Influence on Modern Thought*, edited by Henry Hardy (London: Chatto & Windus, 2006).
- (8) Isaiah Berlin, *Freedom and Its Betrayal: Six Enemies of Human Liberty*, edited by Henry Hardy (London: Chatto & Windus, 2002). 一九五一年にBBCラジオで講演がなされたときの表題は'Six Enemies of Human Liberty'であった。
- (9) 拙稿「バーリン自由論の源流——習作 (forso) としての『ロマン主義時代の政治思想』(一九五二年)「同志社法字六八巻二号(二〇一六年)の第三章、および拙稿「バーリン『自由とその裏切り』(一九五二年)を読む」同志社法字六八巻三号(二〇一六年)の第五章。
- (10) Isaiah Berlin, *Political Ideas in the Romantic Age*, *supra* note 7, pp. 243-244.
- (11) Isaiah Berlin, *Karl Marx*, fourth edition with a new introductory essay (New York and Oxford: Oxford University Press, 1996). 福留久大訳『人間マルクス(第四版)——その思想の光と影』(サイエンス社、一九八四年)。なお、バーリンの『カール・マルクス』(原著)の初版は一九三九年だが、本人による改訂は一九七八年の第四版が最後である。邦訳としては、原書の第三版および第四版のものがある。本稿では、原著と邦訳のいずれも第四版に依拠する。
- (12) Isaiah Berlin, 'Alexander Herzen', in Isaiah Berlin, *Russian Thinkers*, second edition, edited by Henry Hardy and Aileen Kelly (London: Penguin Books, 2008), p. 212. 竹中浩訳「アレクサンドル・ゲルツェン」アイザイア・バーリン著、福田敏一・河合秀和編『ロマン主義と政治(バーリン選集②)』(岩波書店、一九八四年)三五〇頁。
- (13) *Ibid.*, p. 218. 邦訳『三五九頁』。
- (14) Isaiah Berlin, 'Herzen and Bakunin on Individual Liberty', in Isaiah Berlin, *Russian Thinkers*, second edition, *supra* note 12. 今井義夫訳「ゲルツェンとバクーニン——個人の自由をめぐる」アイザイア・バーリン著、福田敏一・河合秀和編訳『思想と思想家(バーリン選集①)』(岩波書店、一九八三年)。

バーリンにおける自由と決定論について

同志社法学 六八巻六号

六五 (二〇一九)

- (15) Isaiah Berlin, 'The Hedgehog and The Fox', in Isaiah Berlin, *Russian Thinkers*, second edition, *supra* note 12, p. 218. ハンサニア・バーリン著、河合秀和訳『ハリネズミと狐——『戦争と平和』の歴史哲学』(岩波文庫、一九九七年)。
- (16) Isaiah Berlin, 'Alexander Herzen', *supra* note 12, p. 218. 邦訳、三五九頁。
- (17) Isaiah Berlin, 'Historical Inevitability', *supra* note 1, p. 114. 邦訳、二〇四頁。
- (18) *Ibid.*, pp. 122-123. 邦訳、二一九—二二〇頁。
- (19) Isaiah Berlin, 'J. L. Austin and the Early Beginnings of Oxford Philosophy', in Isaiah Berlin, *Personal Impressions*, second edition, edited by Henry Hardy (London: Pimlico, 1998), pp. 143-144. 河合秀和訳「J・L・オースティンと初期のオックスフォード哲学」アイザイア・バーリン著、福田敏一・河合秀和編訳『時代と回想(バーリン選集2)』(岩波書店、一九八三年)一六二—一六三頁。
- (20) *Ibid.*, p. 144. 邦訳、一六三頁。
- (21) *Ibid.*
- (22) Isaiah Berlin, 'My Intellectual Path', in Isaiah Berlin, *The First and the Last*, introduced by Henry Hardy (London: Granta Books, 1999), p. 74.